おおがたぐんじょうりいせき
大県郡条里遺跡　現地公開資料

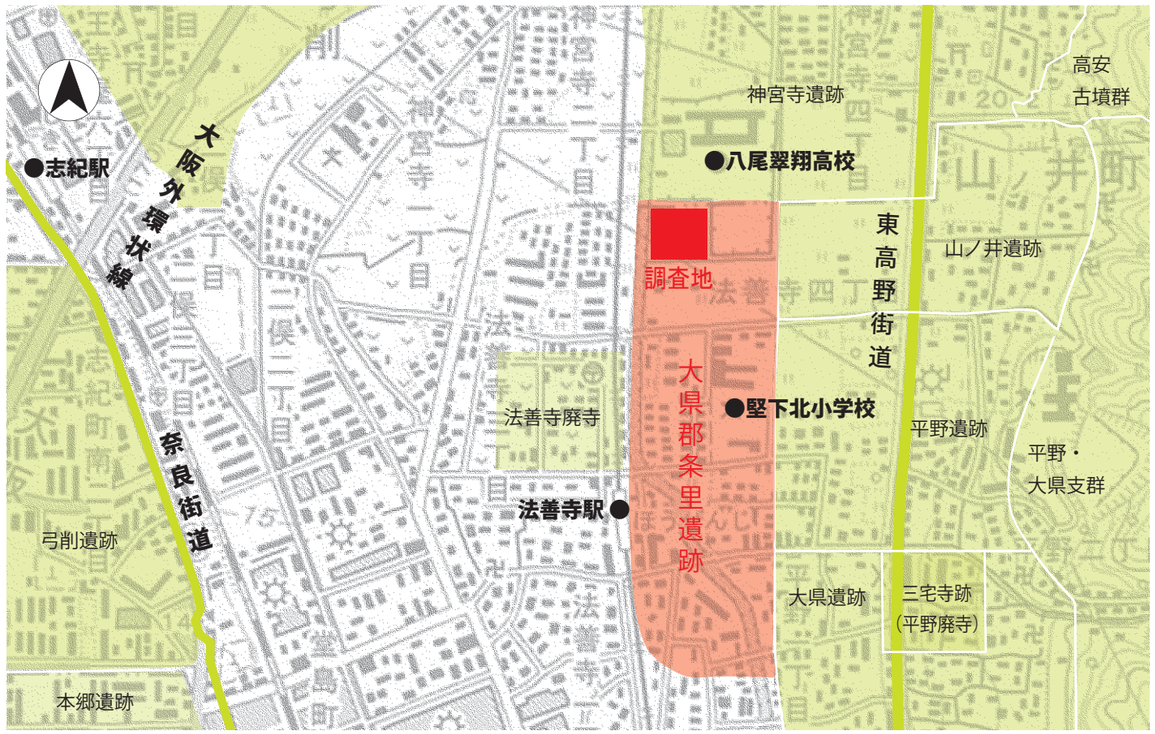
平成 25 年 11 月 20 日（水）
大阪府八尾土木事務所
公益財団法人大阪府文化財センター

1．はじめに

大県郡条里遺跡は、柏原市法善寺２・４丁目、平野１丁目に広がる遺跡です。これまでに縄文時代から中近世の遺構と遺物が見つかっていますが、周辺の地割が古代に整えられた「条里制」の姿を留めていると考えられることから、特にこの名前がつけられました。

遺跡の周辺には、縄文時代後期（約 3000 年前）の集落や古墳時代中期～後期（５～６世紀）の鍛冶工房（かじこうぼう）が発見された大県（おおあがた）遺跡、奈良時代（８世紀）に次々と建設された古代寺院（河内六寺）など、多くの著名な遺跡が存在します。交通の要所でもあったこの地域は、多くの文化財を有する歴史豊かな土地といえるでしょう。

大県郡条里遺跡では、平成 23 年６月より、一級河川恩智川法善寺多目的遊水地設置に伴う調査を進めてきました。その結果、縄文時代・古代・中世の遺構や遺物を多数確認しました。今回は、現地公開を通じて、これまでの成果をいち早く、地域の皆様にお知らせします。



大阪府地図情報システムの地図データをもとに、国土地理院Ｓ＝１／25,000
「大阪南東部」平成 20 年 10 月 19 日発行、「信貴山」平成 19 年５月１日発行に加筆。

図１　大県郡条里遺跡の位置と周辺の遺跡

2．調査成果

大県郡条里遺跡の調査では、主に、①縄文時代晩期（紀元前 500 年頃）の集落、②古代（奈良時代～平安時代・８～ 10 世紀頃）の水田、③中世末期（戦国時代・16 世紀頃）の畑地という、３つの遺構面が良く残っていました。

今回見学していただくのは、③中世末期の遺構面ですが、ここでは、昨年度までの調査成果もあわせてご紹介します。

① 縄文時代晩期（紀元前５世紀頃）

調査地の北半部では、地形に沿って平行にのびる複数の溝と竪穴（たてあな）、土坑（どこう）、柱穴（はしらあな）などを確認しました（写真１）。竪穴には焼土や割れた縄文土器が多く含まれていることから、この場所で人々が実際に生活していたことがわかります。

また、狩に使ったと考えられる石鏃（せきぞく）や、その材料となる破片も多く出土しました。

出土した
縄文時代の石鏃 ▶

写真１　縄文時代晩期（紀元前５世紀頃）の遺構面

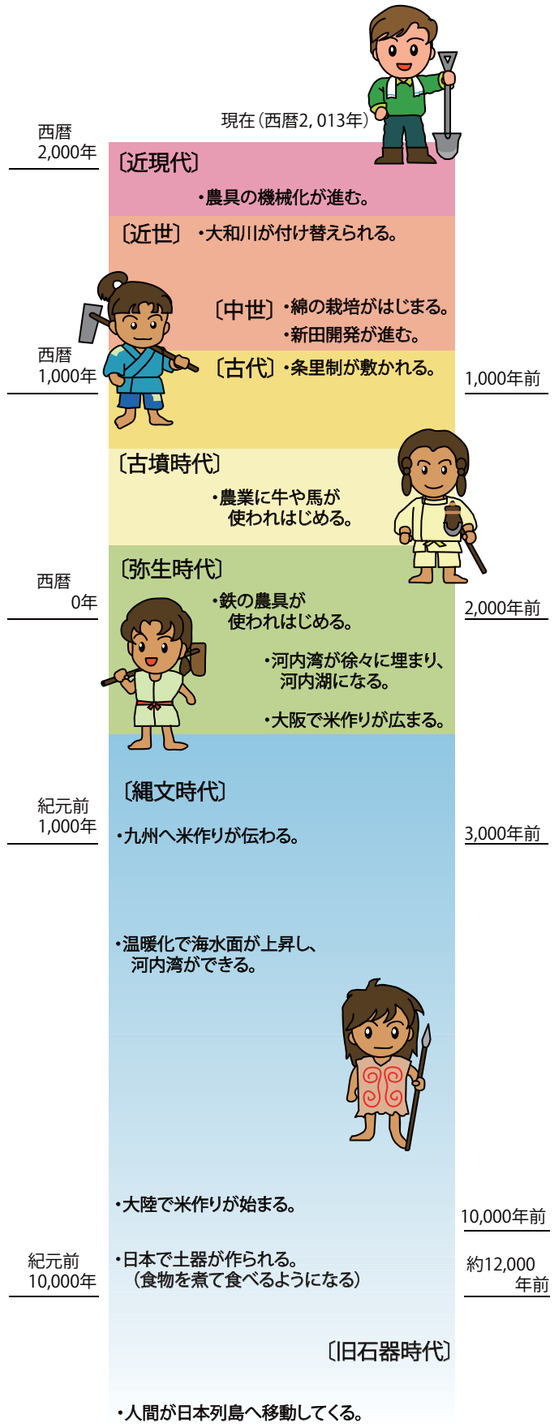


図２　時代の流れと米作りの主なできごと

② 古代（8世紀～10世紀頃）

古墳時代後期（6世紀）からこの地域でも耕作が始められ、平安時代中頃（10世紀）までには、南北方向に主軸をもつ大規模な水田が整えられました（写真2）。

水田の土の中からは、奈良時代（8世紀）の遺物が多く出土しました。文字や模様を墨で描いた容器のふた（写真4・5）、硯のかわりに使った土器、金銅製の鈴（写真6）、瓦など、当時の役所や寺院で使われた品々が含まれています。

また平安時代の水田は、畦（あぜ）があみだくじのような梯子状に築かれていました。地形の細かい高低差にあわせて、水田をうまく四角形に区画しています。条里地割も、この頃までに定着したと考えられます。

③ 中世（13世紀～16世紀初め頃）

中世（鎌倉時代・13世紀）になると、水田はさらに広がり、畦は十字に交差する形に整えられます（写真3）。耕作面には、人間とともに馬や牛の足跡も多く残されていました。家畜を使った農耕が盛んに行われていたようです。水田の土の中からは、馬鍬の歯や鎌の刃など、金属製の農具も出土しました。

15世紀、旧玉串川が氾濫（はんらん）し、水田は一時洪水砂に飲み込まれます。このため人々は、砂地を利用して水田を畑に作り変えました。調査では、区画畦の中に畝（うね）を確認しています（写真8）。

しかし、16世紀になるとさらに大規模な洪水がおこり、畑は厚い砂に覆（おお）われました。その後人々は、砂地を集めた高地で綿（わた）を作り、窪（くぼ）んだ低地で米を育てる島畠（しまばた）を営むようになりました。

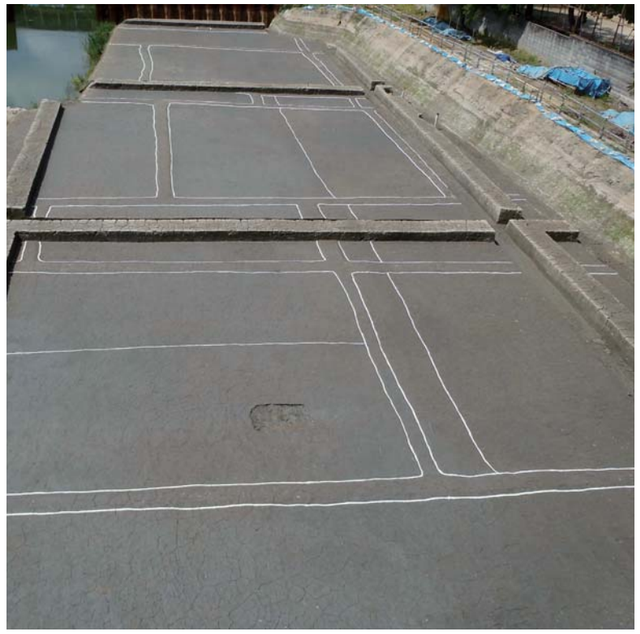


写真2　古代（平安時代・10世紀頃）の水田

写真3　中世（鎌倉時代・13世紀初頭）の水田

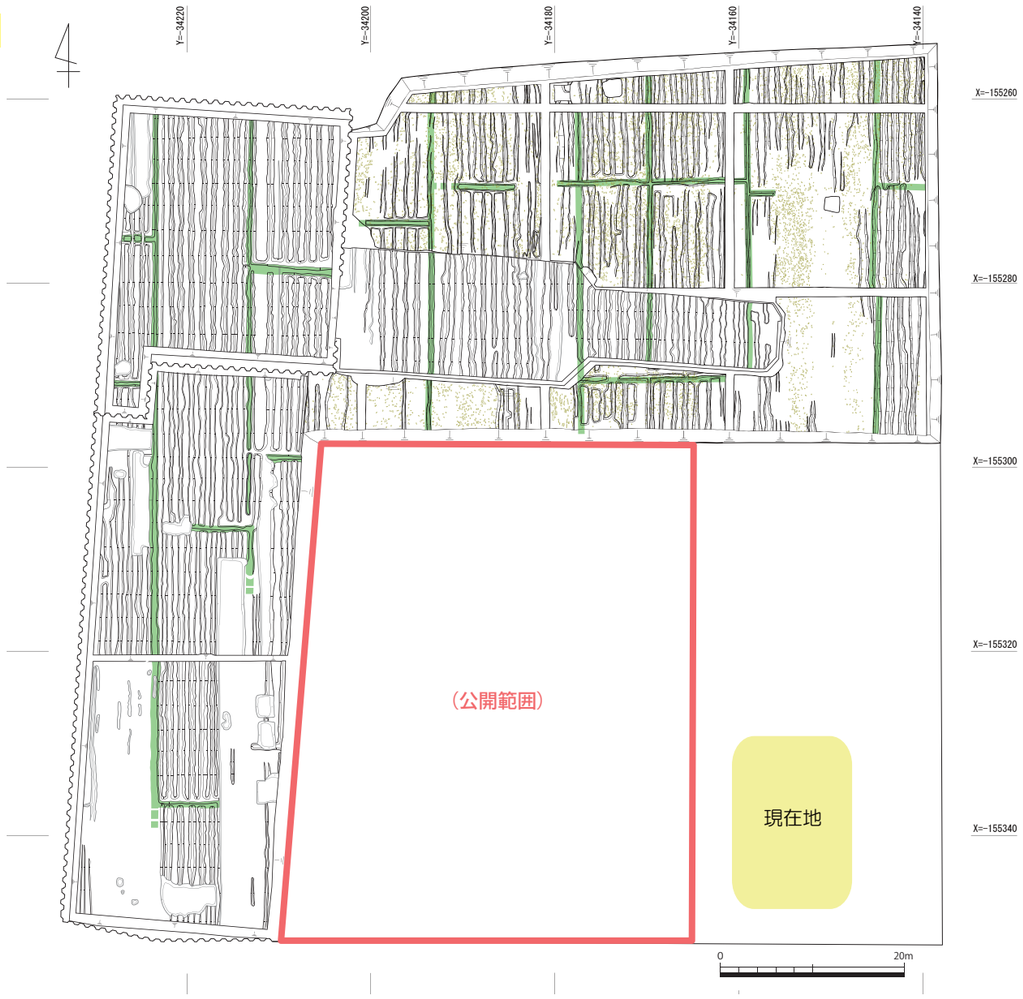


図3　中世末期（16世紀初頭）の畑

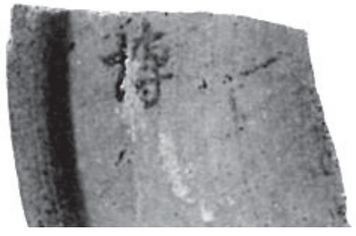


写真4　土器に書かれた文字「博」
（奈良時代・8世紀）

写真5　水玉模様が描かれた土器
（奈良時代・8世紀）

写真6　金銅製の鈴
（奈良～平安時代・8～10世紀）

写真7　出土した鎌の刃
（鎌倉時代・13世紀初頭）

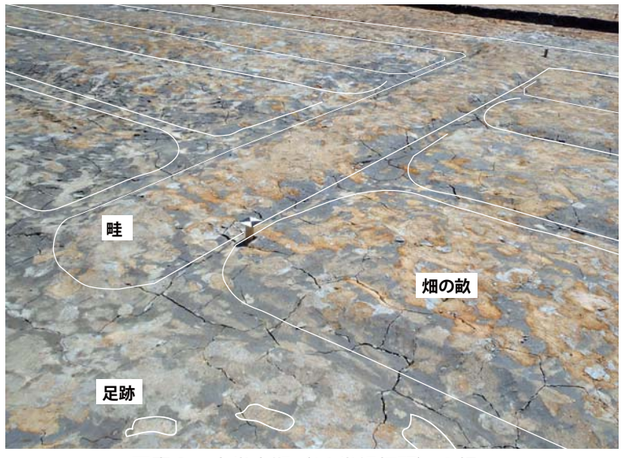


写真8　中世末期（16世紀初頭）の畑